UU-TEAの活動を振り返る
―スリランカ紅茶プランテーション農園コミュニティの抱える問題と学生による国際協力への取り組み―

国際学部　栗　原　俊　輔

はじめに

栗原研究室では、スリランカ中部高原地帯に広がる紅茶プランテーション農園コミュニティとの交流を2017年より続けており、2018年にJICA草の根技術協力事業が採択されたことを受け、本格的に「UU-TEA」として本学学生と現地コミュニティ、特に同世代の若者との交流を進めてきた。UU-TEAはスリランカの紅茶プランテーション農園の現状について、国内はもとより海外でも広く知ってもらうことを目的とし、2016年ごろから少しずつその活動の幅を広げ、また運営方式も適宜変更してきた。

2020年初頭に始まったコロナ禍においては、オンラインを中心に現地コミュニティとの交流を続けてきた。本稿では、徐々にオンラインからオフラインへと社会も戻りつつある中、いままでの活動を振り返り、また変わりゆく現地の状況・情勢とともにUU-TEAの活動の今後の展望と課題を検討する。

プランテーション問題の背景

スリランカのプランテーション産業は、19世紀のイギリス植民地時代に開拓され、おもに紅茶、天然ゴム、ココナツなどを生産しており、特に紅茶は現在でもスリランカの主要輸出産品であり、重要な外貨獲得資源であり、最近の経済危機下においては外貨不足の代替品として、イランへの原油購入支払いにも利用された[1]。

国の重要な基幹産業であることはいまだに変わらない紅茶プランテーション産業であるが、一方でその農園内に居住する労働者コミュニティの生活環境も皮肉なことにほとんど変わっていない。

イギリス植民地時代の19世紀半ばに南インドのタミルナドゥ州より労働力として導入されたタミル人の子孫が現在でも居住し、農園労働者として従事しているが、2008年までは無国籍であり、インド、スリランカ両国にとっては、プランテーション農園のタミル人の国籍問題は長年の課題でもあった[2]。そのため、スリランカ政府の行政サービスが教育以外は介入せず、プランテーション経営会社が住民の社会福祉を担当していたが、産業重視のプランテーション会社にとっても、農園内に居住するタミル人労働者への社会福祉の提供は大きな負担となっていた。2008年にスリランカ市民権が与えられたあとも、農園という私有地への行政介入の困難さをはじめ、タミル語話者の少なさなど、公共圏を維持・保障することが現在でも深刻な問題となっている。また、現在にいたっても解決していない、土地所有権問題もプランテーション農園に開拓以来先祖代々居住するタミル人の生活環境向上の妨げとなっている[3]。

このような背景から、住民の現状だけを見て支援を行うことは、問題の根本的解決には至らず、各国政府開発援助（ODA）による支援も継続的でなく、またNGOの介入も私有地扱いである農園では、プランテーション会社の許可を得る必要があり、介入が困難であり、活動ができた場合でもプランテーション会社の意向に沿う必要がある。そのため、現在では各国ODAをはじめ、国際NGOの多くはスリランカのプランテーション・セクターから撤退している[4]。

プランテーション問題と日本の紅茶消費者

スリランカのプランテーション住民の問題をガバナンスの欠如による国内問題ととらえるのか、紅茶関連企業や紅茶消費者も関わり、解決すべき問題としてとらえるのか、その整理もいまだについていないのが現状である。しかし、明らかであるのは、世界の一大紅茶生産地であるスリランカの紅茶農園労働者コミュニティと消費者とのあいだには、生活環境やその質に大きな差が存在しているということである。

このような非常に複雑な文脈は、学生にとっても理解するのには時間を要する。先進国と途上国という二項対立の関係の上に成り立つ、支援者と被支援者という単純な関係ではなく、自分自身も現地の貧困の遠因になっているかもしれないという観点は、日本で国際協力を学んでいるだけでは、その文脈を想像しづらい。無意識のうちに、現地での問題解決の阻害要因に少なからず関わっている可能性があるということは、論理では理解できても、受け入れることには個人差がある。すなわち、他者への支援の前に、自身の立場を理解する必要があり、このことを学生にも十分に理解し受け入れてもらうことは、この活動において、もっとも重要な点である。

農学部との合同授業からUU-TEAへ

UU-TEAの前身は2016年３月に実施された「農学部・国際学部連携国際協力人材育成プログラム[5]」の参加学生による、スリランカの紅茶プランテーション農園コミュニティ訪問から始まる。

当該プログラムでは、後期に学内での座学（ワークショップ形式）にてプロジェクト・マネッジメント手法の１つであるPCM（Project Cycle Management）を学び、その実践の一例としてスリランカを訪問した。国際機関やJICA、NGOへの訪問とともに本学協定校であるペラデニヤ大学とも交流し、合同調査という形式で紅茶プランテーション農園を訪問し、現地コミュニティの抱える問題などを、ペラデニヤ大学の学生と本学学生の混成チームを結成し、労働者コミュニティを戸別訪問した。このことにより、参加学生の問題意識が高まり、帰国後もスリランカの紅茶プランテーション農園に居住する労働者コミュニティに何かしたいという声があがり、2017年の学園祭では、任意団体「サリーランカ」として日本のNGOであるPARCICが行っているサリーのリサイクル雑貨やスリランカ産有機紅茶の販売などを実施した[6, 7]。

その後、2018年２月より、JICA草の根技術協力「紅茶プランテーション農園における青年層を活用した学童補習活性化」事業が開始され、より有機的に学生の取り組みを当該事業と連携させるべく、2018年４月に「UU-TEA学生広報委員会」を栗原研究室の主宰という形式で立ち上げた。当該JICA事業の活動や現地の様子をインスタグラムなどのSNSを活用し発信することや、講演会や報告会を実施することをおもな活動とした。

2018年６月22日には当該事業の現地での活動が本格的に開始されるのに合わせ、プランテーション問題に詳しい、スリランカのOpen University教授のチャンドラボーズ氏をお招きし、「プロジェクト・キックオフミーティング」をUUプラザにて開催した。その際には、栃木県の管轄であるJICA筑波や宇都宮市役所関係者も参加し、現地での問題解決には国内での発信も不可欠であることを確認した（写真１）。

写真1. キックオフミーティング後にチャンドラボーズ教授（写真中央）とともに。

また、このキックオフミーティングに先立ち、UU-TEAのインスタグラムを開設した[8]。当時は、「農学部・国際学部連携国際協力人材育成プログラム」および2017年度から単位化された「海外フィールドワーク演習II」の参加者、そして栗原研究室ゼミ生を中心に約20名程度がUU-TEAの活動に参加しており、学生によるインスタグラムの運営を開始した。

第１回目の投稿内容は、キックオフミーティングの宣伝であり、その後不定期に投稿をしている。2020年ごろより、これを毎週１回の投稿と統一した（写真２）。

写真2. UU-TEAのインスタグラム第1回目の投稿はキックオフミーティングの告知であった。

UU-TEAの活動

JICA草の根技術協力事業のキックオフミーティング開催後には、より効果的な国内発信活動にむけて、学生の意見を取り入れインスタグラムを中心とした広報班、イベント等企画運営のイベント班、現地との交流を企画運営する交流班と３つのグループに分け、それぞれ興味のある班にて、各学生が活動する形態とし、UU-TEAとしての定例ミーティングを水曜の昼休みに開催している。なお、その後のコロナ禍により、この３班を広報班とイベント班に再整理した。また、この頃より、名称をUU-TEA学生広報委員会からUU-TEAへと変更をした。

このUU-TEAの特徴として、「ゆるやかな参加」が挙げられる。教員の希望もあり、各班の核となる学生以外は、基本的に参加も退出も自由にし、自身の興味とスケジュールに合わせて、参加してもらう方式で運営してきた。ただ、この方法は、学生の自主性に任せすぎ、運営が滞ることも見られるため、JICA資金で実施している現地事業などは、担当学生を決め、業務を行うように進めてきた。一方で、事業の広報機能であるUU-TEAは学生のできる範囲で活動をすることとした。

学内での広報については、現地事業の活動状況について、インスタグラムで紹介したものを写真入りで複数紹介し、インスタグラムを行っていない方々への情報共有ツールとして、定期的に作成してきた（写真３）。

写真3. 学内等掲示ポスターにて、現地活動の様子を伝えるインスタグラムの投稿を紹介。

また、イベント開催関連のポスターについては、開催告知だけでなく、かならず開催報告についても作成し、共有することとした。インスタグラムでは簡単にできる広報業務であるが、印刷物を作成し、活動を共有することにより、SNSに慣れていない世代にも、現地の状況を知ってもらうべく、学内での掲示とともに、関係者へメールなどでの共有にも使用している。

また、宇都宮大学図書館（峰キャンパス）にはスリランカと紅茶についてのディスプレイの設置を行っている[9]。これは、学生が大学図書館へ交渉し実現したものである（写真４）。

写真4. 宇都宮大学図書館本館2階にあるスリランカの紅茶関連文献と資料、UU-TEA紹介のディスプレイ。

また、2020年３月にはこれまでの記録をまとめたフォトブックを作成し、関係者へ配布した。

UU-TEAが地域と協働で実施したものは、2018年12月に、当時スーパーグローバル・ハイスクール（SGH）に指定されいた栃木県立佐野高校の生徒と紅茶農園の子どもたちとのオンライン交流会が最初となる。SGHの活動の一環として、スリランカの紅茶プランテーション農園について調査研究している佐野高校生が、ぜひ現地の様子を見学し、子どもたちとも交流したいとの要望があり、UU-TEAの学生が準備・調整をし、実現した。当時はまだZoomはなく、スカイプを使用しての交流であり、通信状況や画像の不鮮明さなどがあったが、このような取り組みは、今後のUU-TEAの取り組みに１つの可能性を示した。

また、海外フィールドワーク演習IIで現地を訪問した学生の報告会を、宇都宮市のアンテナショップ「宮カフェ」にて、宇都宮市の協力という形態で開催した（2019年６月）。当該授業の参加学生13名による現地訪問報告会とともに、宇都宮市広報広聴課の方や市民団体である「うつのみや紅茶の薫るまち推進委員会」の方からの宇都宮と紅茶についての話などを、一般参加者も含めて約40名へ向けて、現地の状況と問題点、日本の市民ができることなどを発表した。翌年には、栃木県唯一の紅茶工場である那須の紅茶を訪問し、日本とスリランカそれぞれの紅茶生産にかかわる人たちについての情報交換を行い、生産者と消費者のあいだの距離について学んだ。

UU-TEAによるおもな活動は以下のとおりである（表１）。

表1. UU-TEAおもな活動

日時	内容	おもな参加者と関係者
2018/６/22	JICA草の根技術協力事業キックオフミーティング	・宇都宮広報広聴課 ・JICA筑波 ・うつのみや紅茶の薫るまち推進委員会 ・栃木県立佐野高校生徒・教員
2018/11/13	栃木県産紅茶栽培地訪問（大田原市黒羽地区）	・やみぞあずまっぺ協議会
2019/６/26	スリランカ現地訪問報告会（宮カフェ）	・海外フィールドワーク演習II参加学生 ・宇都宮市役所広報広聴課 ・うつのみや紅茶の薫るまち推進委員会 ・学生および一般参加者
2019/10/22	那須野紅茶訪問	・UU-TEAおよび関心のある学生30名
2019/10	農園の子どもたちの絵画展示	*JICA事業対象農園３小学校の児童絵画をラーニングコモンズに展示
2020/２	国際キャリア実習での現地インターン（Sevalanka Foundation）	・インターン３名 ・Sevalanka Foundation（JICA事業現地NGOパートナー） *Covid-19感染症拡大のため途中帰国
2020/３	フォトブック出版	*UU-TEAの活動を写真と文章で紹介
2020/５/29	UU-TEA学生による現地報告会（オンライン）	・佐野高校生SGHスリランカ班
2020/９/23	現地交流会（オンライン）	・佐野高校生SGHスリランカ班
2021/10/23	紅茶農園オンライン交流	・一般参加者 ・JICAスリランカ、JICA筑波 ・紅茶関連企業
2021年度および2022年度	現地青年指導員とのミーティング	*青年指導員とUU-TEA学生の現地事業運営についての打合せ

2020年３月ごろから、新型コロナ感染症拡大のため、一時期は活動も停止していたが、徐々にオンラインでの交流を始め、現地でJICA事業を担当しているSevalanka Foundationや事業で研修を行い育成した、農園内の小学校でアフタースクール・プログラムを運営している農園出身の青年層（青年指導員）とのオンラインでの打合せをおおむね四半期ごとに実施してきた。また、2021年９月に実施した「スリランカ紅茶農園オンライン交流」は中心となる対象者を一般とし参加を募ったところ、国内の紅茶関連企業や紅茶の好きな方々、全国の高校生など、宇都宮とは縁のない方々がインスタグラムを見て参加申し込みがあり、約30名が紅茶農園の様々な施設や住宅などをオンラインでの見学および農園の小学生との交流を行った（写真５）。

写真5. 2021年9月に開催された、一般の方を対象にした「紅茶農園オンライン交流」の様子。

コロナ禍における活動と新しい方策

2020年度は、コロナ禍における活動方法の模索に試行錯誤したが、結果的にはオンラインというツールの持つ可能性を実感した時期でもあった。

2020年度以降に入学した学生にとっては、海外に行くことが不可能であり、その代替としてのオンライン交流会は、少しでも海外との交流や現地の雰囲気が伝わることを心掛け実施してきた。ただ、海外渡航が不可能な中でオンライン交流のみを行うことにも限界があり、2021年度はUU-TEAに参加する学生も若干減少した。

一方で、オンラインと現地訪問を組み合わせるような方策は、活動現場が海外である取り組みにとっては、非常に有効な手段であることも実感でき、今後の活動にも有効に活用できるものといえる。スリランカの現地でも、オンラインでのコミュニケーションが社会に広く浸透し、スマートフォンを使用してのオンラインでのやり取りなどは、コロナ禍前の紅茶農園では考えられなかったことである。また、オンラインを活用することにより、日本国内のどこからでも、交流会に参加できることとなり、宇都宮で報告会や講演会を開催するよりも、むしろ参加の垣根が低くなり、現地の状況を国内に広く伝えることが可能となった。

今後は、オンラインと実地を組み合わせながら、現地の抱える問題解決のために最適な方策を検討していく。

おわりに ―スリランカ経済危機と紅茶農園コミュニティから見えてきたもの

2021年末ごろからの経済危機に端を発し、大統領の退陣とそれに続く燃料不足等により、スリランカ国内は混乱に陥った。毎日の計画停電とガスやガソリン不足や物価高騰による日常生活の麻痺は国民の生活にも多大な影響をおよぼした。

UU-TEAの学生は、オンラインやSNSを通して現地紅茶農園コミュニティと連絡を取っていたが、日々の生活において炊事のためのガス不足等を、現地の生の声を直接聞くことにより、国際協力に関心がある学生にとっては有益な場となった。なによりも、紅茶農園コミュニティの人々が、経済危機下において、実はそれほど普段の暮らしには影響がなかったことを学んだことが、日本からスリランカへの視点がいかに近視眼的、同質的であったのかという気づきとなった。

もともと電化率が高くなく、炊事も薪で行う

紅茶農園内の労働者住宅では、そもそも以前から電気やガスにあまり頼らない生活であったため、直接的な影響は大きくなかったという皮肉な状況である。現地と密に連絡を取れる状態にあることは、学生にとっても現地の真の状況を理解することとなった。UU-TEAの活動が、どのような人たちに対して取り組まれているのか、現地の姿をより立体的に、そして現実的に描き出す場となっていることが、今回のスリランカ経済危機で図らずも証明され、学生にとっても大きな学びとなった。これからも学生にとって学びながら現地との交流を続ける場、国内で発信をする場、スリランカの紅茶農園コミュニティの抱える問題解決の議論の場、そして国際協力とは何かを考える場としていきたい。

参考文献

栗原俊輔（2020）『ぼくは6歳、紅茶プランテーションで生まれて。：スリランカ・農園労働者の現実から見えてくる不平等』合同出版

---

1 2021年末からの経済危機では、スリランカ政府は外貨不足により、イランからの原油購入未払い分2.5億ドル（当時で約280億円）を紅茶で支払った（https://www.reuters.com/markets/asia/sri-lanka-settle-251-mln-oil-import-dues-iran-by-bartering-tea-minister-2021-12-22/）。

2 スリランカのプランテーションに居住するタミル人は「インド・タミル」と呼ばれ、スリランカ北東部に紀元前より居住する「スリランカ・タミル」とは区別されている（栗原 2020）

3 スリランカでは、土地と建屋は同一所有者であることが法律で定められているが、プランテーション農園の土地については、国有であり、各プランテーション会社が国から50年のリースを受けている。すなわち、農園内の施設（建屋）は国有になるはずだが、現在でも所有者は未定であり、また農園内に居住する労働者住宅も同様である。すなわち、農園労働はは銀行に融資を受けにくく、また担保などにもできない。JICA（当時はJBIC）が2002年に円借款を供与した際にも、農園労働者住宅改修融資が結果的に断念した経緯がある（国際協力機構事業後評価 2012）。

4 紅茶産業の中心であるヌワラエリヤ県では、38のNGOが県NGO局に登録しているが、そのうち国際NGOは4団体であり、34団体は現地NGOである（ヌワラエリヤ県事務所NGO局の2021年度登録団体一覧より）。

5 2014年度より国際連携教育支援経費を活用し、農学部と国際学部の合同授業を2016年度まで3年間開講し、その後、2017年度の国際学部改組に合わせて「海外フィールドワーク演習I・II」として単位化された。

6 特定非営利活動法人パルシック（PARCIC）は、スリランカで有機紅茶推進プロジェクトや同国北部元紛争地域の女性たちの収入向上事業としてサリーをリサイクルしたバッグなどの雑貨販売を行っている（https://www.parcicorg/srilanka/）。

7 サリーランカのPARCIC商品の販売はこの学園祭のみとなり、その後は学生有志が、サリー商品などの販売を北関東地域でのイベントなどで手伝うこととなり、当該学生が卒業した2019年3月まで継続した。

8 https://www.instagram.com/uu_tea_srilanka/

9 現在でも大学図書館2階のリファレンスコーナー脇に設置してある。